

埼玉県越谷市における都市開発

小 針 章 子

越谷市は都心から25km圏内にあり、高度成長期の都市の拡大に伴い、急激な人口増加を経験した衛星都市としての発展を余儀なくされた。社会増が大幅に自然増を上まわる時期は37年から48年の間であった。この時期に、総人口は約4倍に増え、多くの農地が工場用地、宅地へと転用されていった。市の規制はさしも厳格なものではなく、営利企業による乱開発が進んだ。この開発は、衛星都市としての性格から、鉄道に沿った細長い地域に集中していた。この急激な人口増加・開発は、誰も予想すらできないものだった。それ故、次第に問題が表面化することになる。特に、水害に関連する地形上の問題だ。この市は、川によって形成された低地であり、もとは沼地だった地域が多く、本来生活に適しているのは川に沿った自然堤防ぐらゐのものだったからだ。さらに、当然のことながら、ありとあらゆる公共・公益施設が大幅な不足状態に陥った。元来、水田を中心とした農業主体の町であったのに、急に外からの流入人口による受動的な立場で始まった都市開発だからやむをえまい。

しかし、衛星都市として、特にベッド・タウンとしての役割が強い場合、永住希望者が多く住宅地としての充実が要求される。量から質への転換をはからねばならない。総合振興計画が、47年に立案され、49年に第一期中期計画がスタートした。近代的な住宅都市を目指したこの計画は、次の5つの項目から成り立っている。(1)都市基盤の整備、(2)自然環境の保全、強化、(3)自然環境の整備、拡充、(4)産業経済の振興、(5)教育文化の向上。昭和60年、30万都市を目標にした計画である。

58年現在の開発状況は、その構想からはかなり趣きを異にするものとなった。市内における東西南北にそれぞれの特徴が表面化してきたのである。

それは以下の4地区に分類できる。Ⅰ集団住宅等を含む新興住宅地域—北Ⅱ官公庁、中枢機能の集中地域—東、Ⅲ商業、その他サービス業の集中地域—南、Ⅳ無色の地域—西。

このような特徴が現われたのはなぜか。まず、水害に伴う自然条件。人口増加が急であったがゆえに、さらに強調されたといえる。これは特に、宅地・農地に強く現われた。次には、人工的な制約。国・県等、より広域的な計画によって、市の計画が規制された。そして、市の計画においてもその施行順序がその後の開発を大きく変えた。凄まじい勢いで成長している市だし、地形問題も手伝って、土地利用を左右する力を持っているのである。特に意味を持つのは、下水道・道路の施行順序である。最後に、時間と位置による不運もあげたい。より東京寄りの草加市と、いち早く市として存在していた春日部市との間にあり、一番都市に力のあった時期に衛星都市として発展することを求められたことだ。

今後、この4地区はどのような発展をみせるか。おそらく、ⅠとⅡは住宅地として、ⅡとⅢは商業中心地として、接し、隔合してゆくだろう。市内の東側の南北を貫通する大動脈となる八潮越谷線の開通が、この支柱になるだろう。そして、市の計画から開設されない越谷駅西口を中心とするⅣは、地形上の問題も加わり、この動向からはずれてしまうと考える。

産業基盤が弱体である住宅都市は、都市計画を強力で推進してゆくほどのダイナミズムを持ち得ることは難しい。人口増加の中心が春日部市に移動したこともあり、今後の開発発展はこの立場を大きく変える、もしくは逆転させるような力は少なくとも持てないだろう。